

## 炭素ゼロ運動にみる環境倫理

— 生長の家の環境方針と教団実践 —

寺田喜朗

本稿は、我国において最も積極的に環境問題に取り組んでいると目される宗教団体である生長の家を事例に、教団実践の具相、共有されている環境倫理、教理的な背景を明らかにすると共に、新宗教運動が推進する環境活動の優位性と困難性を検討することを目的とする。

生長の家は、副総裁(当時・二〇〇九年に総裁就任)谷口雅宣(一九五一-)の強力なリーダーシップの下、環境活動に積極的に取り組んできた。二〇〇〇年に独自の「環境方針」と「行動指針」を発表し、これに基づいて、翌年、本部・総本山がISO14001の認証を取得、二〇〇七年には全事業所が認証取得を完了させている。会員家庭には、電気・ガス・水道・灯油・ガソリンおよび肉食日数を記入する「生活の記録表」が配布され、全国五九教区で開催される講習会を活用した啓発活動が定期的に行われている。さらに二〇〇七年から炭素ゼロ運動が開始され、二酸化炭素排出量の削減に取り組みとともに、五〇〇〇トン分の排出権を購入した。二〇一一年までに本部・総本山・別格本山で、二〇一六年までに布教拠点五九事業所で炭素ゼロの実現を目指している。連動して太陽光発電装置の普及に取り組んでおり、事業所のみならず、会員家庭にも一kwあたり五万円の助成を行っている(二〇〇七年)。二〇

一〇年現在、七七四人の会員家庭が設置、事業所を含めた国内の総発電力は四七二三kwとなっている。なお、昨年からは電気自動車の購入にも最大三〇万円の助成を行っている。

以上の教団実践は、上述した「環境方針」に基づいて推進されている。ここでは、現在の地球環境問題は「国家の枠組みを超えた問題」だという認識、未来世代の利益を考えて行動すべきという「世代間倫理」の認識、人間を自然の一部として捉え、自然を支配しようとする態度そのものに環境問題の原因を見出す「人間中心主義からの脱皮」という認識が示されている。この三点が同教の環境倫理の要諦をなしている。

この認識の教理的背景には、「山川草木国土悉有成仏」「有情非情同時成仏」、自然界の諸々の事象に「観世音菩薩の説法」を読み取る仏教的な自然観、および聖書や古事記等から抜粋される「すべては一体」の思想がある。また、ヒンズー教やネイティブ・アメリカンの教えをはじめ、世界の宗教すべてに同様の思想が流れているとされる。そして、「天地一切のものと和解せよ」「神はすべての渾てである。(略)一枚の木の葉、一輪の草花、日光、空気(略)ことごとく神の生命・智慧・愛の実現ならざるものはない」等といった谷口雅春の言述が引証され、開教当時からの教えの連続性が主張されている。

以上の環境活動には、新宗教運動特有の優位性と困難性が看取される。生長の家の環境活動は、谷口雅宣の強いリーダーシップの下に推進されている。トップダウン式の運動組織だからこそ、これらの先進的な取り組みが可能になったという優位性がある。他方、環境問題への取り組みに魅せられて新宗教へ入

信する者がいないことも事実であり、会員の「よろこび」や「やりがい」に直接結び付かない社会活動の徹底が、教勢停滞の遠因になってしまふ、という困難性もある。会員からの「専門家の受け売りで言われるより、「人間とは」「神とは」等々の宗教的な根本的な話をして頂きたい」という不満、「言葉の力を以て人類を光明化しようとする集団の副総裁が、(略)人類の幸福を連想できない出来事ばかりを集めて不安感や恐怖感を煽っている」等といった「違和感」は早急に解消されるべきであろう。宗教活動と社会活動のバランスを再検討し、持続可能な環境活動を推進していくことが同教に課せられた課題と言えらる。

### パネルの主旨とまとめ

寺田喜朗

近年、宗教の社会(貢献)活動へ多くの研究者が関心を寄せている。多くの成果が提出されているが、中でも、稲場圭信・櫻井義秀編『社会貢献する宗教』は、この領域の研究の意義を広く学界に認知させた意味でエポック・メイキングな成果だったと思われる。同書は、複数の研究者が、さまざまな手法を用いて、諸宗教の「社会貢献活動」を論じた内容だが、総論的な論文やエクステンシヴな手法を用いた論文が複数収録される一方、特定教団の個別の「社会貢献活動」に照準したケース・スタディは少なかった。また、同書は、「社会貢献活動」を様々

なカテゴリに分類して議論を進めているが、環境倫理ないし環境問題への取り組みについての論及は極めて少なかった。本パネルは、同書が指摘した「具体的な調査研究の蓄積こそ今後の課題」との認識を引き継ぎ、企画されたものである。

周知のように我国では、公害問題、および地球環境問題の深刻化の報道―資源枯渇・環境汚染・砂漠化・温暖化等―を受け、既に様々な宗教者・宗教団体が環境問題への取り組み、ないし環境倫理に対する啓蒙活動を行っている。本パネルは(地球環境に関わる客観的な分析・議論は括弧に置き)、宗教者・宗教団体による環境問題への具体的な取り組み、および提唱されている環境倫理、さらに現代の若者の間の自然観ないし基層的な(アニミスティックな)心性に照準化し、ケーススタディを試みるものである。

本パネルの意義は、以下の二点にあると考えられる。まず、教団という形態を採らないNPO団体(シンプルライフ普及センター)、理論的サンプリングに基づいて選定された新宗教教団(立正佼成会・生長の家)のケーススタディを試みることにより、この領域の研究史に厚みを加える、という意義である。また、現代の若者達のモノ観、自然観を実証的に検討する作業も、研究史上、重要な意義を有すると考える。いま一つは、学界内外に対する情報発信である。これまで上掲三団体は、いずれも積極的に環境活動を推進してきたにもかかわらず、学界および一般社会における認知度は低かった。これをまずは学界において共有し、今後の宗教の社会(貢献)活動のあり方を検討する有効な素材となすことを我々は企図した。